悠久山公園

悠久山公園は春になると多くの人を訪れ、特に桜が満開の4月上旬から中旬にかけては多くの人で賑わいます。秋もまた人気の季節で、紅葉が散歩道に茶色、赤、黄色等さまざまな色を加えます。この公園は、すぐ東側の悠久山にちなんで名づけられました。

集い場としてのルーツは、江戸時代(1603-1867)に長岡藩を中心とした藩政を担った牧野忠辰(1665~1722)の時代に遡ります。忠辰は、後に公園となるこの地に数本の桜を植樹しました。その頃から西の山のお花見が習慣になりました。

現在の公園は、長岡の300周年を記念して1918年に開園しました。エネオス石油の創業者で長岡出身の山田又七(1855~1917)の発案によるものです。

公園の入り口近くにある、250年近くの歴史を持つ蒼柴神社は、毎年11月の七五三で目立ちます。神社の裏手には、歴代の長岡大名14代と戊辰戦争(1868年~1869年)で命をかけて守った武士の記念碑があります。

地元の言い伝えによると、シロの主達は蒼柴神社の近くに住む為に、江戸(現在の東京)から長岡に移り住んだと言われています。シロは家族が恋しくて、家族と再会するために元の家から250キロ以上も歩いてきました。

2018年に長岡市の400周年を記念してシロ神社は建てられました。そのすぐ近くには、市内の高齢者によって建設された「蛇橋 *snake bridge*」があります。

橋の横には、作家であり教育の先駆者でもある小林虎三郎(1828~1877)の記念碑もあります。彼は病翁と呼ばれており、「米百俵」の思想を展開したことで知られています。

1868年の明治維新の際、長岡は食糧難に見舞われましたが、市の指導者たちは100袋の米を手に入れ、住民を養っていました。虎三郎「お米を100袋食べたら一瞬で無くなってしまふ。しかし、それを教育に当てはめれば、明日には1万個、100万個のバッグになる可能性がある」と述べ、彼はお米を売って、そのお金で学校を建てることを提案しました。最初は抵抗もあったが、地域の人たちに受け入れられ、米を売って得たお金は、現代の小学校の前身である国漢学校の建設に充てられました。

悠久山公園の向こう側には、長岡の過去の著名な人物の記念碑があります。戊辰戦争では、反戦の精神を持ちながらも帝国軍と戦った武士、河井継之助(1827~1868)を顕彰するものがあります。もう一つの記念碑は、著名な作家、小説家、哲学者である松岡譲(1891-1969)を讃えるものです。

動物好きの方や小さなお子様連れの方には、猿の囲いがある「悠久山動物園」がおすすめです。

長岡市歴史資料館は、この公園の大きな魅力です。白を基調とした多層構造の建物は、1868年の戊辰戦争で焼失した長岡城など、日本の封建時代のお城をイメージしています。現在のJR長岡駅の跡地にあったお城です。1968年の開館時には、エントランスのファサードの一部を形成する石垣に、城の基礎から出土した多くの石が組み込まれていました。

館内には、現在の長岡市を築いた人々を通して、長岡の歴史を詳しく紹介しています。展示品の中

には、13代にわたって藩を率いてきた牧野家の遺品が保存されています。その他にも、第二次世界大戦の海軍指導者である山本五十六(1884-1943)など、最近の著名な人物の遺物が展示されています。